

浦島伝説と近代文学続考

藤 本 徳 明

はじめに

私はかつて「浦島伝説と近代文学」と題して、明治以降の近代、現代の文学と、浦島伝説との交渉を考察してみたことがある。^{註1}

その時点で、言及し残したのものや、その後の検討の中で発見したものが相当数に達したので、改めて先の拙論を補正する必要を感じ、続考として、本論でとり上げることとした。

次に、先論で掲げた作品と、その後見出した作品を表示することとする。①～⑭は、先論（注1の論文は、本論と密接に関係するので、以下は、単に先論と呼ぶこととする）でとり上げたもの、⑮～⑳は、本論ではじめてとり上げるものである。（括弧内は成立年次で、①～⑭は年次順に並べているが、⑮以下は、内容別とした。また、初出年次を確定し難かったものも二、三ある。）

- ① 「新浦島」 幸田露伴（明28）
- ② 「浦島」（『落梅集』） 島崎藤村（明34）
- ③ 「玉篋両浦嶋」 森鷗外（明35）
- ④ 「新曲浦島」 坪内逍遙（明37）
「長生新浦島」 同上（大10）
- ⑤ 「浦島太郎の出発」 武者小路実篤（大3）
「浦島の独白」 同上（大3）
「新浦島の夢」 同上（大8）

- ⑥ 「浦島と乙姫」 同上（大14）
 - ⑦ 「浦島さん」（『お伽草紙』） 太宰治（昭20）
 - ⑧ 「Dの複合」 松本清張（昭43）
 - ⑨ 「公害浦島視機関」 筒井康隆（昭45）
 - ⑩ 「短小浦島」 小松左京（昭47）
「帰って来た男」 同上（昭41）
「ウラシマジロウ」 同上（昭52）
 - ⑪ 「幻の騎馬王朝」 邦光史郎（昭51）
 - ⑫ 「三日月情話」 佐々木守（昭51）
 - ⑬ 「浦島異聞」 豊田有恒（昭52）
 - ⑭ 「浦島草」 大庭みな子（昭52）
 - ⑮ 「天女の密室」 荒牧義雄（昭52）
- （続考）
- ⑯ 「浦島太郎」 関根弘（昭37）
 - ⑰ 「浦島」 半村良（昭46）
 - ⑱ 「あべこべ浦島」 石川喬司（昭54）
 - ⑲ 「世界から言葉を引きば」 同上（昭53）
 - ⑳ 「浦島家の元旦」 同上（昭44）
 - ㉑ 「鼠浄土」 宗谷真爾（昭38）
 - ㉒ 「浦島」 都筑道夫（昭54）
 - ㉓ 「竜宮城」 殺人事件」 斎藤栄（昭55）

- ②③ 「半九郎闇日記」 角田喜久雄（昭36）
 ②④ 「かがみ地獄」 都筑道夫（昭45）
 ②⑤ 「神州白魔伝」 荒牧義雄（昭49）
 ②⑥ 「海戦の余波」 泉鏡花（明27）
 ②⑦ 「海神別荘」 同上（大2）
 ②⑧ 「竜宮の乙姫」 川端康成（大15）
 ②⑨ 「河明り」 岡本かの子（昭14）
 ③⑩ 「竜宮の掬摸」 室生犀星（昭11）
 ③⑪ 「腕くらべ」 永井荷風（大6）
 ③⑫ 「細雪」 谷崎潤一郎（昭23）
 ③⑬ 「青べか物語」 山本周五郎（昭35） 他
- 右表にも示されるように、先論でとり上げた作品数を上まわる多数の作品を見出しえたわけである。ただし、続考でとり上げる作品群の共通した特色は、先論のものと異なり、浦島伝説を、本格的にかつ真正面からとり上げた作品は、はなはだ少いということである。そのゆえに、先論の時までに管見に及び難かったという事情もあるわけである。たとえば、先論の①～⑥のごときは、文豪級の作家たちが、おおむね、正攻法で、浦島伝説に取材したものであったのに対し、本論では、その種の視座に立つものは、SFコントともいふべき⑮⑯⑰⑱に過ぎず、その他は、大半が別の主題の副次的素材として処理しているものと見なしうるのである。
- とはいえ、それらは、それなりに、古典的モチーフと近代文学との相関の事例研究の対象としては十分の価値を有するものと思われるので、本論で続考を企てた次第である。
- なお、本論は、先論の続考という性格上、必ずしも、時代順に考察することはせず、内容において共通する作品グループを、まとめて考えることとした。したがって、主題と浦島伝説との関係が、比較的緊密で、先論のSFグループと関連させて考えやすいSF系の⑮～⑳をはじめにとりあげ、併せて⑳㉑㉒の推理系、次いで㉓～㉕の伝奇系、㉖

⑳㉑㉒の本格的作品群、そして番号を付さないその他の作品群という順序で考察してゆくものである。それゆえ、⑮～㉑の配列順序は、先論のような年次順ではもちろんなく、重要度順でもなく、しいて言えば、論及の都合による順序であることを、あらかじめお断わりしておきたい。

I

最初に、SF系と目すべき⑮～㉑の諸作品について、内容紹介と小考を試みてゆくこととする。

⑮ 「浦島太郎」 主人公浦島太郎は、平凡な保険外交員。竜王星 関根 弘 という異星に誘拐されて、二世紀後の地球に帰還した人物だ。帰ると、地球人は、放射能障害によって目が三つになっている。

竜王星人は、太郎を生体解剖、リモート・コントロール装置を体内にうめ込み、美人ロボット乙姫により洗脳させて、親竜王星思想を太郎に吹き込み、携帯記憶装置としての玉手箱をもたせ、「竜王星の民主主義と宗教」を大いに宣伝させる役割を与える。

詩人関根弘の、珍しいSF的作品だが、発表年次の昭和三七年の政治的状况と、発表誌である「新日本文学」の政治的立場が、そこに色濃く投影していることはたしかだ。当時はキューバ危機や米ソの核実験競争で、これまでにない政治的危機感が高まっていたころであり、その中で、米ソ、とりわけ米国は、ライシャワー駐日大使などを中心に、積極的文化政策をとっていたが、そういうものへの反撥が、このSFには強く底流していそうだからである。

⑯ 「浦島」 次は、半村作品だが、半村は多作なSF作家で、半村 良 他にも、同種モチーフの作品もあるが、これは、正面切って「浦島」をタイトルとした短編。

主人公浦島太郎は、バーテン見習三年めのウラ公として登場する。「亀甲形の奇妙な機械」——おそらくタイム・マシンによって、江戸

時代の豊屋浦吉が、昭和戦後の下町に突如出現、彼の「落語家みたいな喋り方」を好いたラーメン屋の音子となじみになる。しかし、向うの世界にいるお袋を案じて、彼をこの世に連れてきてくれた華僑のマスターに依頼、帰郷したが、彼の言い分は全く信用されない。知己の名としてあげた音子は乙姫、妙子は鯛、弘江はひらめ、英子はえい、倉木はくらげと尽く誤解され、皆お伽噺から来たうそだとして叱りつけられる。

SFでありながら、下町人情噺風の設定や、バーテン見習の主人公など、半村良の生い立ちをも反映し、落語的な楽しさにもじみ出た、個性ゆたかな小品とすることができよう。

⑰「あべこべ浦島」 東京大学で、最初のSF講座を担当した人と

石川 喬司 して話題の主となったSF作家であり、評論家でもある石川にふさわしい、純SF的視点から合理的に解釈された浦島話のショート・ショートだ。

放射能で汚染され尽した未来の地球で、漁もできず嘆く漁師浦島太郎は、超光速宇宙船とも、タイムマシンともみなされるカメにつられ、竜宮城へゆく。彼を喜ばせたのは、そこには、地上で亡んでいるタイやヒラメなどの魚たちが元気よく泳いでいたことだ。

竜宮城で彼は、若返ったような心地がしたが、それは心地でなく事実だった。つまり、竜宮城では、時間は逆に流れていたのだ。ただし、竜宮城内で、その影響は外に現われず、外界へ出ると現われることとなる。

若返った浦島は、過去の地球にもどり——もつとも玉手箱というバリヤーで保護されている間は、大人の姿を保つことができる——乙姫の依頼に応じ、地球の放射能汚染を防ぐべく「歴史の書き換え」という任務を遂行しようとしたが、犬に吠えつかれ、思わず、玉手箱を放り出した。そのとたん、時間は急激に後退、太郎は赤ん坊となり、白い煙となって、消えてしまった！

合理的でありつつ、奇想天外な、いかにもSF界の理論家の作にふ

さわしいコントだが、昭和五四年四月二九日「朝日新聞」「みにストーリー」欄所収のものだ。

⑱「世界から言葉を引きげば」 実は、同じ作家による、右のあべこ

石川 喬司 浦島」を解題するような作品が、前年五三年の「SFマガジン」一〇月号に発表されている「世界から言葉を引きげば」である。

その書き出しは、作者自身を彷彿させる主人公が、母の臨終の枕元で、自分がなぜ、エスパーとなりえなかつたかということ、母の若い日にさかのぼって探ねるといふ状況を描く。その中で、主人公の原稿内容という形で、P・K・デイクの「逆まわりの世界」、B・オールドイスの「隠世代」、映画「二〇〇一年宇宙の旅」など、時間が逆に流れるモチーフの作品がいくつも紹介され、先の「あべこべ浦島」のモチーフを連想させる。この作品と浦島モチーフの関わりは、母の死後、母を偲びつつ、主人公が、母の愛聴した「新曲浦島」のレコードを聞く所で示される。そのレコード・ジャケットには、若い日の母の筆蹟でworld word loveの語が記されたカードがあった。主人公はそのとき、world引くwordはL、すなわち、loveであり、この三つを含むものとして、「新曲浦島」——つまり、timeがある、と考えるのである。

浦島伝説に取材した坪内逍遙の④「新曲浦島」（これは先論で取り上げた）に、さらに取材した作品という点で、浦島伝説の受容の息の長さをも示す、興味深い作品でもある。

⑲「浦島家の元旦」 石川喬司の浦島モチーフに対する関心はなか

石川 喬司 なか根深いようであり、昭和四四年新春発表のコントにも「浦島家の元旦」という作がある。宇宙船旅行をする大家族が、人工冬眠や、亜光速飛行によるローレンツ収縮がもたらす、いわゆる「ウラシマ効果」——地球上より、ロケット上の方が時間がゆるやかに流れる現象——のため、二七歳の主人公、三〇歳の弟、八八歳の長男、四六歳と八歳の孫といった奇妙な家族が新春を寿ぐ風景を

描いた小品である。総じて、石川喬司の浦島モチーフの作品は、SFの中の「S」性——つまり科学性の要素が濃いのが特徴といえよう。

最後に、SF的でありつつ、哲学的でもある浦島モチーフの作品として、宗谷真爾の「鼠浄土」をあげることにする。

②①「鼠浄土」 主人公の医学部教授明光は、癌の特効薬を求め

宗谷 真爾 研究しつつけるうちにノイローゼ気味となる。

そんな彼の身边に、「東条秀樹」と名乗る黒い鼠を思わせる人物が出現、明光の研究の助手になることを申し出る。夢の中で、鼠の浄土であり、かつ竜宮でもある奇妙な世界を訪れた明光は、その翌日、癌の特効薬を発見、東条の協力のもと大量生産に成功、世界中の癌患者に福音をもたらす。

が、何年かののち、その特効薬が実はむざんな死を招く毒薬であったことを知った明光は、自分をそんなはめに陥れた東条に復讐のメスを揮う。と、東条は、巨大な鼠に変身、さらに黒い気体となって実体を失う。

スモン薬害などを連想させる、医師作家宗谷らしいモチーフだが、竜宮はここでは、邪悪と死の本源の世界——禍いを招く知の世界として描かれている点が、個性的といえよう。

②①「浦島」 SFとは関わり深い推理小説における浦島モチ

都筑 道夫 ーフにも、ここでふれておくこととしたい。

シヨート・シヨート作家として名高い都筑道夫のコントで、掌編ながら、浦島伝承を真正面からとり扱い、独自の解釈を与えた「浦島」をみることにする。

老人とその息子、息子の情人で、目くらましの術にたけた美女、の三人が一組で、浦島の子孫とされる長者の家を訪れ、玉手箱の煙で老人が息子の扮する若者に若返り、美女の乙姫が出現するという幻術で、箱を売り歩いてきた。と、そのからくりを知った長者が、部下を引き連れ、三人を追い、男二人を殺し、女を我が物とする、という筋。

ロマンチックな浦島伝承が、徹底した合理的解釈で、ハードかつク

ールに脚色されている点が特色である。都筑には、後述する②④「かがみ地獄」という伝奇小説もある。

②②「竜宮城」殺人事件」 次は、「方丈記殺人事件」「徒然草殺

齋藤 栄 人事件」など、古典と殺人事件をからめたユニークな作品シリーズを多く発表している齋藤栄の、作品集「お

伽噺殺人事件」中の一編である。

「竜宮城」という名の老人ホームで、「浦島太郎」の人形劇を上演中、ホームの女医、そして園長と、連続殺人事件が発生する。園長は海亀の甲羅の上で、釣竿を持って死んでいるのだから、明らかに昔話を意識した殺人であった。ただし、昔話との関連はそれまでで、話の本筋は、あくまで謎解きの興味にあるものである。

この他にも、時間旅行、異郷漂遊譚などSF的興味に富んだ浦島——竜宮モチーフは、管見に及ばぬ他のSF作品にもたぶん多く取り扱われているのではないかと思われるし、田中光二「幻魚の島」(昭52)、山田正紀「アフロディーテ」(昭55)、川又千秋「海神の逆襲」(昭55)などの新進作家による、海洋を舞台としたSFには、一見浦島談的色彩の濃厚なものも多いが、直接、浦島や竜宮に言及していないものは、本論ではとり上げなかったことを、おことわりしておく。

次いで、伝奇小説風の②③④⑤の三作品について、前述にならない、紹介してゆくことにする。

②③「半九郎闇日記」 時は享保二年。赤穂浪士らの没後一四年をへ角田喜久雄 没。浅野家江戸屋敷に奉公していた女たちが、次々と何者かに殺され

てゆく。

八丁堀の同心水木半九郎は、知己の美女お京のみならず、自分の恋

女房にして、江戸奉行大岡越前守の娘でもあるお柳までをかどわかされ、必死に浪士一味のゆくえを追求する。

一味が要求する「将監闇日記」とは、竜宮の謎を書いた秘文書であり、その竜宮一族は、平忠盛の子孫である乙姫を中心とする平家の末

裔であった。その一族が、東国の秘境尾瀬沼にかくす巨大な富を狙って、偽装浪士の暗躍は続いていたというものである。

⑭「かがみ地獄」　こちらは、関ヶ原の戦いのあとのころ、紀伊の

都筑 道夫 山中にひそむ真田幸村の子大助が主人公。大助は大阪方の再起を期して、全国を遍歴するうち、木曾山中で、秘宝の謎をひめるとされる鏡を争う霧隠才蔵や猿飛佐助、石川五右衛門らの抗争にまきこまれる。

それに、反徳川の志では一致する海賊グループ乙姫と浦島太郎の一家も加わる。乙姫、実は関ヶ原の戦いに敗れた石田三成の忘れがたみ八汐であり、浦島太郎は、三成の臣下、毛利甚左衛門の一子多聞之介で、互に恋仲の美男美女である。

前作の乙姫が平家末裔であるのに対し、こちらは石田の遺子との設定は異なるが、天下分け目の戦いの敗者の子孫が形作る秘密結社が、共に竜宮と乙姫に見立てられている点で共通しており、その辺が興味深い。

⑮「神州白魔伝」　先論でも、荒牧には、浦島モチーフの伝奇推理

荒牧 義雄 ⑭「天女の密室」のあることにふれたが、ここでは、伝奇歴史SFともいべき「神州白魔伝」で、部分的にだが、浦島モチーフが用いられている。

主人公は平賀源内。松前におもむいて、美しい遊女朝霧を愛したが、彼女は、天皇家にも匹敵する古い血筋を誇る氣多家の子孫であり、しかも、異界人とおぼしい白魔に犯され、奇怪な子を生む。

その朝霧との交渉の中で、源内は、タイム・トンネルともいべき「時の穴」の存在を知り、浦島太郎の竜宮と伝えられるものは、時間の流れがこの世とは異なる異次元世界にして、「無字」の国、すなわち幻のムー大陸であろうと推測する。しからば、大亀とは、「時かご」(タイム・マシン)にして、竜宮は、日本神話の高天原、仏教の須弥山、キリスト教のパラダイスとも共通し、それらに「無字」世界の痕跡が存するとする、すこぶる壮大な伝奇ロマンへと展開してゆく。

II

さらに、純文学系、もしくは本格派の作品の世界に目を向けると、ここにも、浦島モチーフを扱った多くの作品を見出すことができる。泉鏡花は、竜宮——浦島モチーフを相当好んだ作家のようで、かなり本格的に扱った「海戦の余波」の他にも、その発展作ともいべき「海神別荘」もあり、「日本橋」には「河岸の浦島」、「由縁の女」には「竜宮の戸」のしみだしが見え、「伯爵の釵」、「毘首羯摩」、「甲乙」、「山海評判記」などには「竜宮」の語が再三用いられ、「竜潭譚」や「河伯令嬢」におけるがごとく「竜神」、「竜王」のたぐいの語まで数えれば、枚挙にいとまがない。私はかつて、鏡花の文学を、母胎に象徴される他界——聖なる山と水と女の世界の物語だと論じたことがあるが、竜宮にまします乙姫とは、まさに幻妙なる他界の聖なる水の女神なのであり、鏡花がこの浦島伝承を酷愛したのは決して偶然でないように思われる。

それゆえ、二二歳の若書きである「海戦の余波」に、浦島伝承をとり入れたのは、彼におけるその志向の根深さを示す事実だが、まず、その作品の内容をたどってみることにする。

⑯「海戦の余波」　この作品は「幼年玉手箱」に掲載されたもので、泉 鏡花 掲載誌名がすでに浦島伝説と関わるのは興味深い。それが、それゆえ作品も童話風であり、主人公は松枝千代太という小学生。海軍中尉たる父が、日清戦争に出征中なので、母に伴われ、故郷越後の漁村で暮している。

とある嵐の日、難破した船を救わんと小舟で海に出た千代太は、荒海に落ち、気づくと小舟に一人で漂っている。そのうち清国船にとらえられ、機密を言えと責められている所を、鯨に助けられる。連れられた先は竜宮城で、美しい乙姫と楽しい日々を過ごす。が、この竜宮にも、日清の「海戦の余波」は襲い、水没した清国兵らが竜宮の宝を狙う。

その清兵らを圧伏したのは、同じく戦没の英霊となっていた千代太の父中尉であった。

父にさとされ、故郷に帰らんと決意した千代太が目をさますと、母に見守られて、病院のベッドにあった、という所で話は結ばれる。

⑳ 「海神別荘」 他愛のない作品とも言えは言えるが、美しい年

鏡花 鏡花 上の美女と年少の美少年の官能を離れた愛という、鏡花一代のテーマはすでに明らかであり、人界と他界の交流は、のちの傑作戯曲「天守物語」や「夜叉ヶ池」「海神別荘」のモチーフにもつらなる。とりわけ、「海神別荘」は、乙姫の弟たる公子と、人界の美女の愛を描いて、浦島伝承の別のヴァリエーションと見なすことができるのである。

鏡花が、水辺の愛を生涯描きつづけたことは知られているが、「鏡花にもっともちかいか」という評価も与えられているが、川端康成にも、掌編ながら、水中の愛を描いた「竜宮の乙姫」という作品のあることは興味深い。

㉑ 「竜宮の乙姫」 「わが墓石を女より丈高き石にて作れ。女にわ

川端 康成 が墓石を抱かして海に葬れ」というのが、若い後妻とその恋人にむごたしく殺された父の遺言である。

先妻の子ふたりは、女を裸にして墓石にしばらくつけ、断崖の上から突き落したが、落ちてゆく途中で、墓石は美しい小船となって、まっすぐ沖へ走った。

それと知った女の恋人も、女の夫の墓石を抱き身を投げると、その墓石も船に変わる。

殺した男に感謝せねばと恋人が言うと、女は、「感謝の心を起した時あなたの船は墓石になりますよ」と警告、男の船は沈み、女も後を追う。

だまされたと怒った男は逆に浮き上がり、海の底に沈んだ女は「竜宮の乙姫」になる。

この話を作者にきかせた女は、のちに恋人と心中したが、彼女のみ

生き返り、欺いていた夫に抱きついた。そのうちの彼女のことばは、「昔話とおなじでしたわ。おしまひまですつかり……」であったという所でこの「掌の小説」の一編は終わる。

小品ながら、凝ったプロットであり、背徳の耽美主義ともいべきテーマは、いかにも川端の若い日の作品らしい個性を濃厚に漂わせている。珍重すべき浦島モチーフの作の一つと言えよう。

水と女と恋というモチーフは、浦島伝承取材作としては当然の結果でもあろうが、しかし、作者自身、水のほとりの旧家の娘に生まれ、恋多き一生を送り、「水精」や「家霊」、「原母」などのモチーフを絢爛たる作品群に形象化しつづけた岡本かの子が、「河明り」という名作の中で、浦島——竜宮モチーフを扱っているとすれば、これは文学的にも相当注目に値するものがあるはずである。

㉒ 「河明り」 岡本かの子 作者没後の昭和一四年発表された作品だが、語

説執筆の場所として、東京の大川の畔の旧家の一室をかりたことからその家の娘と知りあう。たぐいまれな美貌と才知をもち、「亀島河岸のモダン乙姫」とあだ名される美女なのに、恋する男に背かれて嘆く不幸な人だ。同情した「私」は、彼女を伴い、男と会わせるため、シソールにまでおもむく。男は、逆境に育って「女」を愛することができず、罪もないヒロインを苦しめることとなったと「私」にのみ告白する。

が、南海に日を過すうち、「南洋の海は」「現実を夢にし、夢を現実にして呉れる、神変不思議の力を持つてゐる。むかし印度の哲学詩人たちが、ここには竜宮といふものがあるが、陸上で生命が屈託するときに、しばらく生命はここに匿れて時期を待つのだといった思想」は、南洋においてのみ理解しえた。今こそ、男は、ヒロインをうけ入れられるようになった、と告白させているのである。

「大乘と名附けられる、つまり人間性を積極的に是認した仏教経典等には」「竜宮に匿れてゐたのを取り出して来たといふ伝説が付きも

の「なつてゐる」といった指摘などもちりばめ、仏教に深い理解をもつていた岡本かの子にふさわしく、おびただしい浦島モチーフの作品中では、異例な、仏教的世界観にも目くばりの利いた異色作と呼ぶことができそうである。

かの子はまた、「女体開顕」や「生々流転」等では、そのヒロインを、水性の「ウール・ムッター(根の母)」にもなぞらえているが、そんなかの子の文学にとつて竜宮モチーフとの関わりはかりそめのものでありえないことが理解されるのである。

③⑩ 「竜宮の掏摸」

鏡花と同郷人であり、川端やかの子の作風とも、室生 犀星 も、その耽美性において一脈相通じる室生犀星

にも、「竜宮」の語を題名に冠する作品がある。短編童話「竜宮」は、亀を主人公として、憧れの世界は身近かにこそある、といういわば「青い鳥」テーマの作品だが、本格的小説としては、「竜宮の掏摸」があげられる。ヒロインの美しい悪女切子は、男を渡り歩き、財を蓄える。さらに生まれた子どもを種に、父たる可能性のある男たちを脅して歩くという、いわゆる「市井鬼」もの時代——昭和一年の作だ。

「竜宮のやうな都会の底に墮ちて行つた」という本文中の表現にも、ここでの「竜宮」概念は暗示されている。同時期に刊行されたエッセイ「衢の文学」の中で、「東京も非常に小説的な、陰影と彩光と罪や罰の都会、市井鬼や竜宮鬼の都会となつてゐる」「夜はこの都会をまるで竜宮のやうに盛り上げ浮き上らせる」としているのが、そののり分りやすい解題となつていともいえる。「竜宮」とは退廃美の都会「東京」、ヒロイン切子は背徳の「乙姫」でもあろうか。

③⑪ 「腕くらべ」

永井 荷風 て「三年」の後だ、というところにも、浦島伝承の投影はありそう、その点で彼女は、女浦島としての顔も示しているのである。

思えば、荷風の「腕くらべ」で、ヒロイン駒代が、数年の空白のち、花柳界に復帰の席で、「浦島」を踊つたという趣向も、単なる偶

然ではなさそうに思われる。

駒代もまた、花柳界で嬌名をうたわれながら、ひとたびは家庭におちついたものの、旦那の死後、結局、もとの世界へ帰つてきた女浦島でもあつたからである。

ところで、鏡花——荷風——犀星——康成——かの子といった系譜が、そろつて浦島モチーフを、大なり小なり扱つており、それらの作家らの作風に微妙に共通するもののあることを痛感させられるが、そこへ谷崎潤一郎を加えるとき、耽美性——伝統志向——たをやめぶり——一種のエロテイシズム、といった様々な共通の要素を彼らの中に看取せずにはいられないのである。

③⑫ 「細雪」

谷崎潤一郎 にも浦島のモチーフの投影を見てとることができる。

幸子と貞之助の夫婦が旧婚旅行をした河口湖畔の(水辺の)ホテルで、幸子が枕元の魔法鑼の表面を見ながら、「此の部屋が広大な宮殿みたいに見えますねん」とはしゃぎ、貞之助の目には、そんな若返つて美しい妻が「水晶の珠の中に棲む妖精か、竜宮の姫君か、王宮の王妃のやうにも見えるのであつた」と感じているところである。

「細雪」全体の構想の源流を、「竹取物語」の求婚譚に求める論者もあるが、浦島伝承も、他界の美女と人界の男の、結ばれざる恋というテーマにおいて「竹取」と共通するものがあり、それらは、美女讃仰を生涯の主題とした谷崎のとりに上げるのに、いたつてふさわしい民俗的モチーフでもありえているのである。

③⑬ 「青べか物語」

山本周五郎 異質ながら、大衆文学の芸術性の一つの完成者の地位を占める山本周五郎の、すぐれた連作集「青べか物語」の一節にも、異色の浦島モチーフを見出すことができる。

連作中の一編「土堤の冬」(昭35)だが、「私は、浦島物語のパロディをこころみていたのだ。共産主義のドグマに挑んだ主題で、最少限度にでも頭脳と胃袋と生殖器の能力が均一でなければ、公平なる分

配と所得はあり得ない。ということをも五幕の喜劇に組立てたものであった」という一節がある。

文中にそのパロディの一節も、引用されているが、先の指摘自体、実に鋭いもので、執筆期が第一次安保闘争の高揚期であったことを思いあわせ、社会主義運動のはらむジレンマを、したたかにリアルな眼でえぐっていることが興味深い。また、その題材として、閉鎖されたユートピアともいべき竜宮を選んでいることも、日本文学の浦島伝説受容史の中では、注目すべきケースと見なしうるのである。

おわりに

最後に、いずれも、直接囁きはしえなかったが、明らかに、浦島伝承を扱った作品の系列に入るべきものとして、幸堂得知に「浦島次郎蓬萊嘶」というのがある由であり、横田順彌氏の紹介によれば、風頼子なる人の作に「竜宮奇談黒貝夢物語」、かの巖谷小波に「閻魔裁判鯨髻抜」という作があるといわれる。風頼子のは、明治一三年刊のSF的政治小説で、太平洋下の理想境たる竜宮城に、黒貝(国会のもじり)制度の整った理想社会がある、という話であり、小波の作品は、大正一三年、関東大震災後の作で、地震の元凶たる鯨を、浦島太郎と俵藤太が閻魔王の法廷で裁くという話だとされる。

その他にも、森敦が、自らの文壇復活体験を浦島になぞらえた対談集「浦島太郎の人間探検記」(昭50)とか、岡本好古「移郷の人」(昭51)や中上健次「紀州——木の国根の国物語」(昭53)における浦島伝説への言及、あるいは、押川春浪「新造軍艦」(明37)や谷譲次「新巖窟王」(昭10)、小栗虫太郎「成層圏魔城」(昭19)などの冒険小説のたぐいに登場する浦島モチーフなどの類は、博搜すれば、さらにその数を増すであろうことは明らかである。今後も後考を期したいと思っている。

ただし、ここでぜひ言及しておくべきは、オーストラリア人作家ロジャー・パルヴァースによる「ウラシマ・タロウの死」(昭53)とい

う作品であろう。越智道雄氏の紹介^{注7}によれば、オーストラリアで太平洋戦争時捕虜となったが、それを恥じ、ウラシマ・タロウの名で死んでいった謎の人物を調査するため、若いオーストラリア人が戦後日本を訪れ、タロウが、実は、生きて宮内庁の侍従をしていたという事実をつきとめるといふ奇抜な内容のようである。浦島伝説と日本近代文学の連関に興味を抱く筆者として興味深いのは、近代文学における浦島モチーフが、ついに、国際的にも進出して行ったことであり、その由来の古さと、影響の広さは驚嘆の他ないように思われる。水野佑氏などの研究^{注8}によれば、浦島伝説の淵源は、元来、南太平洋地域に求めることもできるようであり、先のオーストラリアの小説の主人公の行動半径が、まさに、そうした浦島伝説波及の地域と重なっているようであることも研究者としての興味をさらに深めずにはおかないものがある^{注9}のである。(昭和55・10・1)

注

- 注1 「金沢美術工芸大学学報」第22号(昭53・3)所収
注2 藤本「母胎のロマン——鏡花文学における聖界」(日本文学研究資料叢書「泉鏡花」昭55・6有精堂)所収
注3 種村季弘氏「水中花変幻」(「別冊現代詩手帖・泉鏡花」昭47・1所収)ほか。
注4 吉田精一氏「川端康成論——泉鏡花との比較」(日本文学研究資料叢書「川端康成」昭48・2有精堂)所収。なお、鏡花と川端の雪女——水神モチーフを比較検討した拙論に、藤本「白い地母神——『雪霊記事』と『雪国』」(「雪と文学」昭54・12日本文学風土学会、所収)もある。
注5 伊藤整氏「谷崎潤一郎の文学」(昭45)
注6 横田氏「日本SFこてん古典(1)」(昭55)による。なお、注1の論を発表後、①⑥の作品をも考察した坂口保氏「浦島説話の研究」(昭30)を読みえたことを付記しておく。

注7 越智氏「豪州文学にみる迷路としての日本」(「朝日新聞」昭54・7・17)

注8 水野氏「古代社会と浦島伝説」上(昭50)ほか。

注9 浦島伝説と近代文学の関連については、先掲のもの他に、拙著『日本海のロマン——伝承・文学にたどる北陸史』（昭51・中日新聞本社）中「郷愁のユートピア」もある。また、古典と近代文学の関連を扱った主な拙論としては、先掲のもの他に「近代文学と『今昔物語集』との関連」（本誌第23号・昭54・3）、「近代作家と『今昔物語集』」（本誌第24号・昭55・3）、「現代女流作家と『今昔物語集』」（「金沢大学語学・文学研究」第10号・昭55・2）、「近代作家と『今昔物語集』続考」（「説話・物語論集」第8号・昭55・5）、「近代文学と『今昔物語』」（「図説・日本の古典——今昔物語」昭54・10集英社）など『今昔物語集』関連のもの、また、『北陸の伝承と人間像——歴史を彩った主人公たち』（共著）（昭55・11北国出版社）、「お市の方の愛と死」（『説話文学の世界第一集』昭53・5笠間書院）などもあり、併せて参看頂ければ幸いである。